一

次の文は、ロシア文学研究者が自らのロシア語学習歴について述べたものである。これを読んで、後の問に答えよ。（四〇点）

それから、ＮＨＫのラジオでロシア語講座を聞こうと思い、近所の本屋でテキストを買ってきた。テキストを見ると、月曜から水曜までが入門編、木曜と金曜には応用編をやっている。普通なら入門編をひととおり聞いてから応用編を聞くべきなのかもしれないが、応用編の内容を見たらとても面白そうだったので、欲張ってそちらも聞くことにした。というのもちょうどそのとき、沼野充義先生が吟遊詩人ブラート・オクジャワの歌を読んでいたのだ。たとえば『祈り』と題されたこんな歌である――

神よ　人々に　持たざるものを　与えたまえ
賢い者には　頭を　臆病者には　馬を
幸せな者には　お金を　そして私のことも　お忘れなく……

「でも賢い者なら頭はすでに充分でしょうし、臆病者は馬をもらってももてあましてしまうでしょう、不思議な歌ですね」と解説する沼野先生の飄々（ひょうひょう）とした語り口と、その一風変わった詩に、意味がよくわからないながらも妙に惹（ひ）かれた。なにより優しく心地よいオクジャワの歌声には、いつまでも聴いていたくなるような魅力があった。

それから、少し大きめの本屋へ行って教科書を物色した。ラジオ講座の入門編をやっていたのが宇多文雄先生だったので名前になじみのあった宇多先生の教科書を買い、ついていたＣＤを丸暗記した。歩きながらウォークマンで聞いていると、否定（ひてい）生格（せいかく）の過去・現在・未来をすべて「お金」で説明する例文――「金がない、金がなかった、金がないだろう」が登場し、くすくす笑っているうちにいつのまにか覚えていた。ＣＤの最後では宇多先生が自らロシア民謡を歌っており、その哀愁ある歌詞が心に残った。

そんなふうにして基礎だろうと応用だろうと歌だろうと節操なくロシア語という言語に取り組んで数年が経ったころ、単語を書き連ねすぎて疲れた手を止めたとき、突然思いもよらない恍惚(こうこつ)とした感覚に襲われてぼうっとなったことがある。なにが起こったのかと当時の私に訊(き)いても、おそらくまともには答えられなかっただろう。そのくらい未知の体験だった――「私」という存在が感じられないくらいに薄れて、自分自身という殻から解放されて楽になるような気がして、その不可思議な多幸感に身を委ねるとますます「私」は真っ白になっていき、その空白にはやく新しい言葉を流し入れたくて心がおどる。ごく幼いころに浮き輪につかまって海に入ったときのような心もとなさを覚えながら、思う――「私」という存在がもう一度生まれていくみたいだ。いや、思う、というよりは感覚的なもので、そういう心地がした、というのに近い。この時期、それから幾度かそんな体験をした。

いま思えばあれは、語学学習のある段階に訪れる脳の変化からきているのかもしれない――(1)言語というものが思考の根本にあるからこそ得られる、言語学習者の特殊な幸福状態というものがあるのだ。たぶん。

気づけば、進路というものが自分にあるのならロシア語しかない、と気負うようになっていた。思春期の気負いというのは不思議なもので、いちかばちか、どんな荒唐無稽な夢にでも向かっていける気がする。そのころの自分にとっては、選んだ道で「本気を出せるか否か」というのがいちばん大事な基準だった。(2)加えていうなら、逃げ場がないような崖っぷち、という場所を探してもいた。うちに伝わっていた曽祖父の話を思い出したせいもあるかもしれない。戦後まもなくに亡くなった曽祖父については、一九世紀末の日本にしては珍しく若いうちに英語圏に留学し、帰国後は英文学の翻訳をやっていたということ以外は知らなかったが、ただ「ものすごく変わった人だった」と聞いていた。でも、いいじゃないか。本気でやれるなら。世間一般で普通とみなされている道を外れようとも、ものすごく変わった人だと思われようとも、だからなんだっていうんだ。

私はさらに大規模な書店に出かけ、大きな公立図書館にも通い、ロシア語やロシア文学について手に入る本を片っぱしから手にとった。仲良しの女友達と一緒に本屋へ行くと「ほんと、なっくはロシア関連の本をみつけると見境がないね」と笑われた(「なっく」というのは小学生のころからの私のあだ名だ)。高校卒業後、いっときロシア語の専門学校にも通ったが、やはりロ

シアに行きたいという思いが強くなった。

そうして私がペテルブルグ行きを決めたのは、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて――ちょうど二〇歳になる冬のことだった。

当時の私がどのくらいロシア語ができたのかといえば、とりわけ会話にかんしてはてんでだめだった。もともと文章を読んだり書いたりするのが好きだった私は社交的なほうではなく、いわゆる世間話がものすごく苦手である。ただ、人の話に耳を傾けるのは読み書きにも負けないほど好きで、気の置けない仲の友人数人と集まればひたすら黙って友人たちの会話を聞いているだけで幸せな気分になってしまう(ので、よけいなにも喋(しゃべ)らない)。ロシア語を学ぶにしても得意なところから好き勝手に学んだので、この傾向は強まるばかりだった。ペテルブルグに行って半年ほどしたころ、検定試験を受けた。ロシアが主催している試験で、日本でも定期的に開催されているが、受けたのはそのときが初めてだった。まずは大学受験資格を得るために必要なレベルの級を受験した。結果として合格はしたのだが、会話の試験だけは落第点だった。即不合格ではなく特別に会話のみの追試を許された(追試はまあ、なんとか合格した)のは、聞きとりの点数がよく、筆記が満点だったからだ。つまりは聞き分けのいい犬のようなもので、聞けばだいたいなんでもわかるのに、うまく言葉が出てこないのである。ガウ。

それからも意識的に会話をがんばったわけではないが、ある時期から言いたいことがあればいくらでも語れるようになった。けれど私はいまでも「聞く」のがいちばん好きだ。

新しい言語を学ぶ――その魅惑の行為を前に、(3)人は新たに歩きはじめる。母語ではとうにありふれたものになっていたものごとを、もうひとつの言語の世界でひとつひとつ覚えるたびに、見知った世界に新しい名前がついていく。それはオクジャワの『祈り』のようでもある――賢い者には頭を、臆病者には馬を……この歌の解釈は多様で、たとえば「賢い者には頭」というのは、賢さとは心で悟るものだから頭脳とは別物だということを、「幸せな者にはお金」が必要なのは、幸福か否かはお金の問題ではないことをそれぞれ暗示しているとする説や、そうではなく全体として一般常識的な固定観念に対する皮肉なのだとする説などがある。けれどもそれらの解釈とはまた別の層にある要素として、この詩には言語への希求のようなものがあるように

思えてならない。この詩を読もうとすると、ひとつひとつの単語の辞書的な意味を疑わざるをえなくなり、賢さや幸せという、普段は自明のものと認識している言葉の意味を考えなおすことになる。そうして緩やかにつながる言葉同士の関連性に目を凝らし、意味の核心に迫ろうとするが、(4)核心は近づいたかと思えばまた遠ざかる。「言葉」と「意味」はひとつにはならない、でもだからこそ面白い——そんな感覚が歌にのって伝わってくる。

（奈倉有里『夕暮れに夜明けの歌を——文学を探しにロシアに行く』より）

問一　傍線部(1)はどのような状態を指すのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)から読み取れる筆者の心情を説明せよ。

問三　傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部(4)のように筆者が言うのはなぜか、『祈り』の歌詞に触れつつ説明せよ。

二

次の文は、物理学者であり歌人でもある石原純が書いたエッセイの一部である。このエッセイは一九二五年に出版された本に収められている。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

*成形美術においてはこれを表現するに当たりて種々の実在の自然物を用います。しかるにこれらの自然物は時代の経過するに従って種々の変化をうけもしくは破損せられることを免れないものです。それ故私たちはそれらの変化を受けたものによりてこれを鑑賞するより外はないことになり、また一たび破損せられたならその美術作品は永遠に失われてしまわなくてはなりません。この意味において美術作品は、文芸音楽が永遠に伝え得られるのに反し、(1)悲しむべき運命を与えられたものであります。そしてその美術作品の保存そのことに或る価値が帰せられるようになり、ここにいわゆる骨董的価値が随伴するのです。

一方から考えますと、骨董作品にあらわれる自然的の変化はまた得がたいものの一つとも見られます。特に絵画における色彩の如きはその顔料に物質的制限があるために、新鮮なる場合に落ちついた感じのあらわれないものが、かえって時日を経て光や熱の徐々の作用のために、いわゆる寂を生じ気品を増すようになることは常に見られるところです。これらの自然的変化は時代経過の一つの特質であって、たとえ最初からそれを望んでもなし得なかったものを含むことが出来ます。そこに私は骨董的価値の存在を認めるものではありますけれども、しかし翻って考察すれば、これらの価値は単に自然現象に依存するものであって、決して人間の創作としての芸術の本質に関与するものではありません。私たちはこれを当然芸術批判の埒外におかなくてはならないのです。

なお一歩を進めてこの点に関する根本的な問題に立ち入りて見ますと、(2)美術作品が常に骨董的に取り扱われなければならない理由はそれが自然物を借りてはじめて芸術表現を行っているという性質にあるので、すでにそこに自然現象そのものとの密接な交渉があるわけです。そしてまたその事がらが破損によりて永遠の存続を亡失するという悲しむべき運命をになう所以でもあります。私たちはここに芸術の永遠性をこれらにおいて見捨てなければならないのであろうかという重大な問題に衝き当たります。

私は敢えてこれに対して答えましょう。芸術は永遠のものでなければならないと。そしてその永遠的な効果においてのみ芸術の本質的価値が見いだされるものであると。

しからば美術作品の永遠性ということに対し私たちはどう考えたならよいのでしょうか。

何故に美術が常に骨董と結びつかなければならないかを考察しますと、それはこの場合の芸術表現が極めて複雑な自然現象を借り用いてなされているからに外ならないのでしょう。芸術家の手技を必要とすることにおいては音楽もまたこれと等しいものがあるでしょう。ただ音楽においては楽器そのものがすでに一定のなるべく純粋の楽音を発するようにつくられているために、これを簡単な記号的楽譜もしくは蓄音器によりて比較的安全に記することが出来るのですが、美術にありてはそれがより複雑になっているために、そう容易(たやす)く記号を用いることが出来なくなります。まず音楽では音の一次元的持続を記せばよいのですが、絵画ではそれが通常二次元的面にあらわされ彫塑に到りては三次元的立体になっています。二次元的平面における形体は写真によりてやや完全に模写されますけれども、三次元的立体を機械的に記述することはすでに困難を感じます。その上に絵画の色彩はたとえ一定の顔料絵の具が用いられるとしても、これを調合する程度と、またこれを塗抹する画面材料の光に対する反射及び吸収度の相異によりて種々の変化を呈するために、頗(すこぶ)る多様の複雑さを生じます。これが制作者自らの手を煩わさなければならない原因をなしているのです。

けれどももし私たちの科学が十分に発達したとするならば、たとえば絵画面の各処から一定の光(白光)の一定の照度に対して一定の方向に反射せられる光を分析して、各波長に対する光の強さをあらわす曲線を決定することは決して不可能ではありますまい。そうすればかような曲線の多数によりて絵画面全体の模様を最も精確にしるすことが出来るわけです。また彫塑のような立体的形体を幾何学的に精確にしるすとともに、その形体面の各処の滑らかさ及び光線に対する関係を物理学的にいいあらわすこともまた可能になされるでもありましょう。たとえそれらの仕事は極めて煩雑な手数を要しようとも、それは理論的には何の支障をもつくるものではなく、また一方において人間の芸術の至上的価値を認め、これを永遠に破損のおそれから救うためには、実際上において必要なこととして希求されなくてはならないようになるでしょう。ちょうど私たちの標準の物

指し尺度を永遠に保たせるために物理学者が現に多くの手数を費やしてこれを光の波長によりて代えようと試みているように、もし私たちの芸術をその科学と等しく永遠に伝えようとするならば、これらの科学的方法がそこに応用せられるのを至当としなければなりますまい。芸術はかくして常に再現を可能とせられるからです。

私は芸術がその本質的価値を永遠に保存するために、(3)科学の共助を待つことを必要とするという点に極めて多くの興味を感ぜずにはいられません。芸術と科学とは本来私たち人間の思惟作用について全然別個のものに属しています。しかも芸術がその永遠性を保つために科学の普遍的永遠的価値によらなければならないということを悟ったならば、現実の上において両者の交渉がいかに密接であるかに関して、けだし驚くに足りるでありましょう。この意味をよく体得したならば、すべての芸術家は決して科学を疎んずることは出来ないのです。芸術がその自己の生命を永遠に持続するために実際に科学を必要とするからであります。

（石原純『永遠への理想』より。一部省略）

注（＊）

成形美術＝造形芸術。

問一　傍線部(1)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

三

次の文は、『草庵集』（中世の歌人、頓阿の歌集）について、本居宣長が著した注釈書の一節である。「諺解」という注釈書の解釈を引用した後に、「今按ずるに」以下で筆者自身の考えを述べている。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

山深く分くればいとど風さえていづくも花の遅き春かな

諺解云はく、端山さへ寒きに、山深く入りてはいよいよ寒きゆゑ、端山の花の遅きのみか、奥山も遅きなり。(1)いづくもといふに里の遅きもこもるべし。

今按ずるに、この歌も(2)実の理と作者の見る心とを分けて説くべし。諺解のごとくいひては、混雑して、(3)ことわりたしかならず。山深く分け入る事もよしなくなるなり。歌の意は、まづ奥山ほど寒さのつよきゆゑに、花の咲く事いよいよ遅きが実の理なり。しかるを作者の心は、その道理をしらぬものになりて、里にこそまだ咲かずとも、山の奥には早く咲きそめたる花もあらんかと思ひて、山深く尋ねつつ、分け入れば入るほど余寒つよく、いよいよ風さえて、まだ花の咲くべき気色も見えぬゆゑに、さては里のみならず、山の奥までいづくもいづくも花の遅き春かなと思へる意なり。春かなと留りたるところ、花を待ちかねたる心深し。

（本居宣長『草庵集玉箒』より）

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、「実の理」と「作者の見る心」の具体的な内容を明らかにしつつ説明せよ。

問三　傍線部(3)を現代語訳せよ。